9. イエスは独身だっ たのですか、それと も結婚していたので すか、あるいは男や もめだったのです か?

福音記者が書き残したデータによれば、イエスはナザレで大工の仕事に従事して後(マルコ6.3)、30歳の時に公の職務を始めた(ルカ3.23)。公生活の間、イエスに従うの性や(ルカ8.2-3)、親し接する女性がいた(ルカ10.38-40)。

イエスが独身であったか、結婚して いたか、男やもめであったかについ て、まったく何も書かれていない。 しかし、福音記者は、彼の家族、 母、"兄弟姉妹"について言及するも のの、"妻"について一度も触れたこ とはない。この沈黙は多くを語る。 イエスは"ヨセフの子"として知られ ており(ルカ4.22、ヨハネ6.42)、 ナザレの村人が彼の教えに驚いた 時、「この人は、大工ではないか。 マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユ ダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹 たちは、ここで我々と一緒に住んで いるではないか。| (マルコ6.3) と 感嘆した。イエスが妻帯者であった と思わせるような記述はどこにもな い。長い伝統の中でイエスの結婚の 可能性について語られたことは決し てなかった。そうしなかったのは、

イエスの結婚はイエスを中傷すると 考えたからでも(イエスは結婚の尊 厳を回復した、ルカ19.1-12)、イ エスの神性の信仰と両立しないと考 えたからでもなく、単に歴史的事実 に従っただけである。教会の信仰を 危険にさらす恐れのあることを黙っ ておきたいのであれば、なぜ罪のゆ るしのための洗礼を授けていた洗者 ヨハネから洗礼を受けたことを伝え たのであろうか。初代教会がイエス の結婚について沈黙したかったのな ら、なぜイエスと交際のあった人々 のなかで、特定の女性の存在につい て沈黙しなかったのだろうか。

にもかかわらず、イエスが結婚していたと主張するいくつかの説が広まってきている。基本的にイエスが結婚していた証拠として、1世紀のラビたちの実践と教えを提示する(マグダラのマリアと結婚していたという推測については、「イエスはマグダラのマリアとどのような関係

を持っていたのですか? | を参 照)。ラビであるイエスが独身でい ることは、当時のラビたちにとって 考えられないことであり、結婚して いたに違いない(ラビ・シメオン・ ベン・アザイのような例外はある。 彼は独身でいることをとがめられた 時に言った、「私の魂はトラに恋し ている。他の人たちが子孫を残せば よい。」 Talmud de Babilonia, b, Yeb. 63b)。それゆえ、イエスは他 の敬虔なユダヤ人のように20歳ごろ 結婚し、使命を果たすために妻と子 どもを見捨てたのだろうと主張する ものがいる。

それらの反論に対する答えは以下の 通り。

1) 1世紀のユダヤ教に独身生活が あったというデータがある。フラビ オ・ヨセフォ(Guerra Judía 2.8.2&120-21; Antiguedades judías 18.1.5&18-20)やフィロン(エウセ

ビオによって残された一場面で、 Prep. evang. 8,11.14) や老プリニオ (Historia natural 5.73,1-3) はエッ セネ派が独身生活をしていたと伝え ているし、クムランの中に独身生活 をする者がいたことを我々は知って いる。フィロン(De vita contemplativa) は"テラペウタ"と よばれるエジプトの禁欲主義のグ ループが独身生活をしていたと述べ ている。さらに、イスラエルの伝統 では、エレミアのように、何人かの 有名な人物が独身であった。ラビの 伝統によれば、モーゼも神との親し い交わりを保つために、禁欲生活を 送ったとされる。洗者ヨハネも結婚 しなかった。従って、独身生活は、 一般的ではないものの、前代未聞と いうものでもなかった。

2) 仮にイスラエルにおいて誰も独身 生活を送ったことがなかったとして も、それでイエスが結婚していたと 推定すべきではない。既述したよう にデータはイエスが独身を保うされていたでであるがはまり、かったのであり、からいのであるがればないであるがイに結のの独の独の独自性をであることともも人間であることともも人間を表すが異様に国のである。も神に、のである。もればなどのである。もればなどである。もればなどである。もればなどである。もればなどである。もればなどである。というでもなどはないである。というでもないである。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/9-iesuhadu-shen-datsutanodesuka-soretomojie-hun-shiteitanodesuka-aruihanan-yamomedatsutanodesuka/(2025/12/12)